

# 石見城跡の発掘調査

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

## 石見城跡について いみじょう 石見城跡

は、京都市西京区大原野石見町に所在する遺跡です(図1)。室町時代(14世紀後半から16世紀)、この地域は広く西岡と呼ばれ、複数の小領主が連帯して治めていました。彼らはそれぞれが治める地域に城や館を築きました。石見城(館)もそのうちのひとつと考えられています。

応仁元年(1467)、京を揺るがす応仁・文明の乱が始まると、西岡の領主たちは細川勝元が率いる東軍に属して戦いました。しかし、その中から西軍へ味方する領主が現れたため、一帯は激しい戦火につ

つまれました。

文献によると、石見城は文明2年(1470)に寺戸城主であった野田泰忠らの攻撃を受け、善峰川の対岸にあった上里城と共に焼失しました。以後、石見城の情報は途絶えてしまい、その実態は謎に包まれたままととなりました。

**既往の調査** 平成16年度、都市計画道路中山石見線の建設に先立つ発掘調査が行なわれ、鎌倉時代から室町時代の建物跡が多数発見されました。このうち室町時代前半の建物の北東側にある段丘崖上の高まりや窪みの方向が建物の主

軸と揃うことから、これらが石見城の土塁や堀の跡である可能性が示されました。

令和3年度、京都市は石見城跡の構造を明らかにするため、5年にわたる範囲確認調査を計画しました。調査の結果、複数の堀や土塁で囲まれた鎌倉時代から室町時代の城館跡が地中に残存することが明らかとなりました。以下、調査の成果を時代ごとに紹介します。

**鎌倉時代** 平安時代後期から末頃、遺跡周辺で大規模な洪水がおこりました。これが終息した鎌倉時代(13世紀から14世紀前半)、再



図1 調査位置と周辺の遺跡



写真1 城館遺構面検出状況(西から)



写真2 城館北堀完掘状況(北東から)

び人々が居住しはじめ、現在まで続く景観が形成されます。人々は、まず遺跡の西部に、続いて東部に建物群を設けました（西居住域・東居住域）。

居住域の南東には、幅 3.5m の堀が掘られ、南端には、二重の柵がめぐらされました。また北側の旧善峰川の河川敷には人頭大の石を用いた石塁が造られました。いずれも集落の内外を区別するための施設と考えられます。これらに囲まれた南北約 140m、東西約 150m 以上の範囲が、当時の集落域でした。

また、北側の段丘崖付近(城館域)には、小規模な堀と土塁が造成されました。調査で検出したのはその一部ですが、これらをつなぐと南北長 50m、東西幅 40m 程度の方形区画

として復元できます。この区画は、段丘崖の方位にあわせて設けられており、その高低差を利用した施設であったと推測されます。このように石見城は防御性を備えるようになっていきました。

**室町時代** 室町時代になると、遺跡の状況は大きく変化しました(図 2)。西居住域では建物がさらに数を増し、建て替えが何度も行なわれました。東居住域では鎌倉時代の堀は埋め立てられ、平坦地が拡張されています。前時代に比べて人口が増加したことがうかがえます。

また、城館域では、中心施設を囲む堀と土塁が大幅に拡張されました。特に西側の内土塁は、外方へ張り出すように増築されます(横矢掛<sup>よこやが</sup>り出すように増築されます(横矢掛

け)。この改変にあわせて、堀もコ字形にめぐるように新たに掘りなおされました。また土塁の拡張により郭が手狭となったため、東堀を埋め、より東へ拡張されました。前時代よりもさらに大きく、防御性に優れた施設として整えられたことがわかります。

ただし 15 世紀後半になると建物は減少します。柱穴には火災の痕跡を残すものがあり、石見城が戦火を受けたことを彷彿とさせます。

その後、城の跡地は領主であったと考えられる小野氏一族から村内の寺院である法泉寺に寄進され、竹林や田畑に姿を変えました。今はただ、地表面に残る凹凸が、ありし日の姿を伝えています。  
(京都市文化財保護課 黒須亜希子)

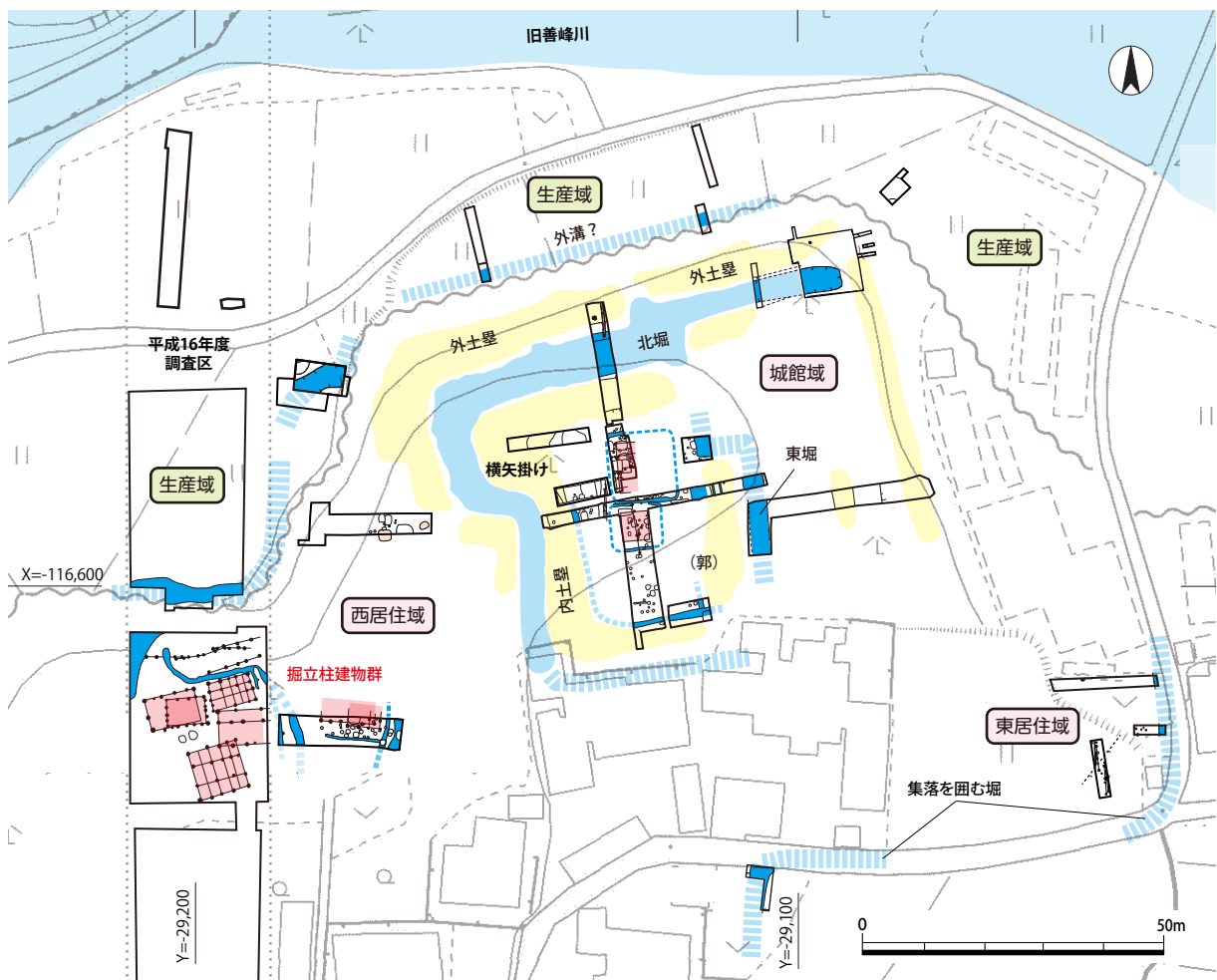


図 2 石見城跡検出遺構の概要図(室町時代)